

〈論文〉

演歌再興—氷川きよしの出現

林 辰 男

はしがき

2004年7月29日付の朝日新聞文化欄〈トレンド〉に、“演歌，存在感じわり回復”というコラムが掲載された。筆者は藤崎昭子とある。

それによれば，2000年テレビ東京系列の長寿名物番組「演歌の花道」の放映が終了した当時，1980年代の黄金時代をピークに演歌のシェアは3%程度まで落ち込んでいたという。それが市場調査会社オリコンのリサーチによれば，03年には7.7%に戻し，本年上半期には8.6%とじわじわ伸びており，同サウンドスキャンジャパンの週間シングルチャート（25日付）でも上位100位中，演歌系が21曲を占めていると報じている。

記者はその原因として，このところJ-Popsが低迷しており，相対的に演歌系のシェアが高まっていることに求め，一方でレコード各社が個性的な若手歌手を売り出して，いわゆるスマッシュヒット（発売と同時にCDがランキング入りすること）が目立つようになり，年齢層を問わず大量のカラオケファンが覚えてすぐ歌えるような新曲が増えつつあるためと指摘した。

その筆頭に，本稿で論じる氷川きよしをあげ，7月の新譜，デビュー5周年記念シングルCD「番場の忠太郎」がオリコン初登場でいきなり2位につけ，9月には日本武道館でライブも予定されていると，高く評価する。

彼はもともと日本コロムビア創立90周年記念歌手として華々しくデビューし，辛うじて間に合って「演歌の花道」でも新人として00年にデビュー曲「箱根八里の半次郎」を歌った。もちろん，まだ派手な振り付けや茶髪もピアスもなしの初々しい姿だったので，

これで股旅物を歌うとは信じられなかったのを覚えている。しかし、この歌はそこそこ当たるかもしれないと直感した。

しかし、まさかあの曲が大ブレイクして、今のような引っ張りだこの売れっ子になろうとは思ってもよらなかった。当初 100 名だった後援会員が今や 15000 人というからすさまじい。演歌のシェアは、彼が 5 年間ほぼ独力で持ち上げたといっても過言ではない。最近では Kiyoshi の別名で、ポップスやニューミュージック寄りのレパトリーにも手を広げ、こちらでは若者らしいテイストのある歌唱が聴ける。この 5 年、彼がレコーディングした作品は、カバー物を含めて 100 曲に迫る。演歌が底を打って、顧みられなくなりつつあった時期の活動としては、これは驚異的と言ってよい。久しぶりの演歌の星なのである。

注)「番場の忠太郎」は、長谷川伸(1884~1963)の戯曲「暎の母」2幕(昭和6年初演)の主演である。番場は江州(滋賀県)の地名。生き別れた母を慕って旅を重ね、江戸柳橋の料理屋水熊の女将おはまを探し当てるが、おはまは結局我が子と気づくものの、他の家族への配慮から否定してしまい、忠太郎は失望して去るという人情物である。新国劇のレパトリーだっただけでなく、映画やTVなどでよく取り上げられる。股旅物の傑作であるだけでなく、定番でもある。

氷川の新曲は前奏と後奏に柘が入り、割ぜりふもあって、本格的な芝居仕立てになっている。

ついでながら、B面の「人情取手宿」もまた、同じく伸の名作「一本刀土俵入り」2幕(昭和6年初演)の主演、相撲上がりのやくざ駒形茂兵衛の物語である。10年前の禪担ぎ時代に恩義あったお蔭の危急を救う報恩のドラマである。幕切れに駒形の名セリフがあり、伸の作品ではもっともポピュラーなものではあるが、やはり新国劇の舞台が忘れられない。曲は台詞も生き、氷川も名唱と言ってよい出来である。

1. 演歌とその現状

まず演歌は立派な音楽であると断言しておこう。

わざわざ当然のことをいうのは、西洋古典音楽だけが音楽の最高到達点だと考えるひとびとからは、音楽とは見なされていないだろうからである。

原初から音楽はあった。次にその表現手段としては、まず声のみの“うた”の時期があり、楽器がそれに代わるものとなったのは、ごく近代からである。簡素なピアノをはじめ、弦楽、木管、金管楽器などの集合体である近代オーケストラでは、指揮者が唯一音を出さない。楽器の方はどうか。近年の回帰趣味から、作曲者在世のころの古楽器を用い、指揮者なしで、あるいはピアノやヴァイオリンを演奏して合わせて指揮するという、いわゆる弾き振りの現象も珍しくなくなった。

一方、人声はどうか？ ア・カペラだけで伴奏を伴うことのない演奏が増えた。この音楽のカテゴリーには、シューベルトの歌曲も氷川きよしの股旅演歌も入る。どちらかが独

占したり優先しているのではなく、平等に存在しているのであり、どちらか一方が音楽的にすぐれているとは一概に言えない。これは Lied (オーストリア)、Chant (仏) もほぼ同義で、両方とも芸術的な古典的な“唄”を指し、フランスではポピュラー・ソングを Chanson と呼んで区別しているだけなのである。

だから、デュパルクの名品⁽¹⁾もエディット・ピアフの「愛の賛歌」⁽²⁾も同じ次元で受けとめられる。オーストリアでもシューベルトの歌曲やレハールのオペレッタ「メリー・ウィドー」⁽³⁾の aria をポピュラーや古典だからと分けているのではない。この二人は一生懸命“流行歌”を作曲していたのである。そして、シューベルトは音楽性がいかに高くても、ついにレハールの「ヴィリアリート」⁽⁴⁾をしのぐポピュラーな傑作を書けなかったという点が違う。

それゆえ、声楽の中には歌謡曲は全部入るが、その逆はなりたたない。この“声楽”がさらに細分化され、歌謡曲があり、その下位に演歌が始めて出てくる。だから、歌謡曲はすべて演歌とは言えないのである。しかし、その歌謡曲こそが声楽の一大分野であり、かつ“流行歌”であると定義しても良いだろう。

しかし、J-Pops とか称して、唄っているのだから、踊っているのか分からないジャンルが横行し、意味不明の英語や近年はグローバル化と称して、ハングルや台湾語で唄うことまであるから、そのけたたましい響きに、年配者たちは内心いい加減うんざりしていたところに、演歌復活・再生のため、格好の素材が現れた。氷川きよしそのひとである。これで沈滞期に入っていた演歌業界がにわかに活気づいてきた。

ここで、まず筆者の演歌観を述べておこう。

たかが演歌、されど演歌である。艶歌、怨歌、縁歌とも言うし、解釈も多様であるが、演歌とは基本的にはもちろん「歌」である。だが、古くは仏教声明から発し、〈コブシ〉や〈マワシ〉、〈ユスリ〉などの技法が承継がれており、その大衆版の行く着く先は、ヨナ抜き短音階による演歌である。また浪曲に近いかどうかで決まる部分もある。よく「歌は3分間のドラマ」と称されるが、単なる劇ではなく、今では演技や舞踊の振りをもなう歌芝居のジャンルになったと考えている。例えば TV で見るほとんどの人気女性演歌歌手のうち多くが、日本調の着物姿で、たいていは振りつけ通り踊っている。氷川も同様であり、殺陣が入ることもある。

もちろん、恋愛の心象風景を述べるにとどまるものも多い⁽⁵⁾。演歌は3番までであるのが普通だが、はじめは4番が多かった。これが大体3番に定着するのは昭和初期で、録音装置や蓄音機の進歩で片面4～5分録音・再生が可能になってからの形であり、明治・大

正時代にはまだばらばらである。通常1番だけの短い邦楽の俗曲から、膨大な鉄道唱歌まで、統一出来ていない。その影響は今にも及んでおり、普通TV放映では、2番を抜いて唄われる。この不遇な2番は、時間の自由なライブや特別な歌謡ショーでしかフルコーラスで歌われることがない。3番構成は諸説あるが賛美歌や小学校唱歌の影響で今の形におちついたらしい。ともかく序幕と終幕しかないのだから、作詞者の苦勞が思いやられる。しかし、伝統芸能の世界では、これは珍しいことでもなんでもない。

まず見せ場だけ抜いて上演するのは、歌舞伎の伝統で、「仮名手本忠臣蔵」など大序から終幕まで通して見たら日が暮れてしまう。春日八郎の「お富さん」も、実は河竹黙阿弥(1816~1893)の世話物、「与話情浮名横櫛」の名場面、^{げんやだな}玄治店の強請の場면을唄っているのである。

もう一つ典型的な実例を挙げておこう。

例えば、三浦洗一⁽⁶⁾にその名も「弁天小僧」⁽⁷⁾という曲がある。三浦といえば「落葉しぐれ」⁽⁸⁾だが、声も歌も良かったものの、タキシードに身をただして直立不動で唄うというステージマナーが真面目すぎて、余り芸人らしくないタイプだった。その意味で「弁天小僧」は mismatch で気の毒だったが、吉田正の曲も良くて大ヒットした。

タイトルから想像できるように、これも元は歌舞伎の名狂言「白波五人男」(^{あおとぞうし}「青砥稿花紅彩画」)の一場、女装した菊之助の正体が露見して、彼が切る啖呵そのまま、いなせで伝法にぴったり歌にはめこまれている。ただし、これは4番まであって、わが3幕もの説には合わない面もあるが、強弁すれば、内容上3幕1場と解することができる。2番が1番のイントロを受けて引き続いて歯切れの良い啖呵だから、これがワンセット。続いて終幕での鮮やかなひっこみ、歌舞伎の舞台そのままである。

牡丹の様な お嬢さん
 シッポ出すぜと 浜松屋
 二の腕かけた 彫り物の
 桜にかかる緋縮緬
 しらざァいって 聞かせやしょう
 オット俺らあ 弁天小僧菊之助

以前を言いやァ 江の島で
 年期づとめの お稚児さん
 くすねる銭も だんだんに

とうとう鳥を おわれ鳥
噂に高い 白波⁽⁹⁾の
オット俺らァ 五人男のきれはしさ

着慣れた花の振り袖で
髪も鳥田の由比ヶ浜
だまして取った 百両も
おとことばれちゃ 仕方がねえ
オットどっこい
サラシは一本切ってきた

素肌にもえる 長襦袢
縞の羽織も 南郷⁽¹⁰⁾に
着せかけられて かえりしな
にっこり被る 豆しぼり
鎌倉無宿 鳥育ち
オットどっこい 女にしたい菊之助 (佐伯孝夫作詞 吉田正作曲)

明るくアナーキーでリズム感もよい曲だが、三浦の演唱は外見通り楷書風で真面目過ぎて、おもしろ味がなく、歌舞伎の華やかな雰囲気や退廃美はまるで伝わってこない。この曲には後に美空ひばり盤があるが、冒頭から巻き舌で伝法な喧嘩口調の啖呵になっていて、これはもう格がちがうと言うほかない。それにひばりは映画でもこの役を演じていて手慣れているから、歌謡曲歌舞伎とでも言いたい出来栄である。また若かりし日ひばりには豊富な芝居・映画経験があるのもこの種の歌には強みだ。

浪曲・講談はもっと堂々と、しかもこれを露骨にやる。一時よく知られた二代目広沢虎造(1899~1964)の「寿司食いねえ、寿司食いねえ」は長編「清水次郎長伝」の、それも「石松三十石船道中」のごく一部である。お寺の坊さんも同じ伝で、長いお経の一部のごく有り難い部分だけを抜いて読んでいる。これが俗に言う抜き読みの習慣・伝統であって、演歌の場合、2番の省略にはこうした先例や伝統にならって、普通は1、3番を唄い、2番を抜くのがいつか定着していったのである。一方で、“唄”は2番が良いという説もあるが。

中にはBOROに「大阪で生まれた女」(BORO作詞 岡山準三・BORO作曲・歌 平成4年)のように18番までの怪作がある。フルコーラスだと実に35分近くかかる。交響曲一作をじっくり聴くのと同じで、ここまでいくとこちらが疲れてしまう。

不思議なことにプロが歌いたがる曲というものもあって、もちろん、各自の好みもあるが、例えば「無法松の一生～度胸千両入り～」⁽¹¹⁾ というのもその一曲である。これはもともと浪曲師上がりで、しかも声域の狭い村田英雄のための書法で作曲され、本来は別々の歌だったのを無理にくっつけた代物で、1番と3番の間に「度胸千両」という幕間狂言が入っていて、3番までいかないと途中では切りようがないので、唄うときは全曲通すのが普通だから、大抵の男声演歌歌手が歌いたがる。それは自分の持ち歌をフルコーラスで歌えないという日ごろの制約に欲求不満もあるからで、この歌は途中を経過句でつなぎ、明確に切らず遅いテンポで通して唄うと普通4分以上かかるため、特に民放TVでは納まり切れないことが多く、せめて全曲録音を望むのではないかと思われる。事実録音も多い。さらに、ひばりを始めこの曲については、女声盤も結構多い。

2. 氷川きよしと股旅演歌

氷川きよし。

TVやDVDで見ると、それほど美形とも見えないが現代っ子に多い足長のルックスに茶髪とピアスをつけて、宝塚のベルバラも真っ青な派手なコスチュームで登場すると、客席はほとんどオバギャルで、ペンライトを振り、「きよし、きよし」と絶叫する。その隣では、無理やり連れてこられたような小父さんが呆然としているのには笑ってしまう。

そして、その衣装で、あろうことか股旅演歌「箱根八里の半次郎」を歌い出すのだから、およそミスマッチもきわまれりと思われそうだが、これが案外そうでもないのは、詞が平易で、内容も深刻でなく曲想が軽やかなのが、現代の軽いビート感にフィットするからだろう。だから、変な深刻さはない。

また、やや硬質ではあるが氷川の高音が美しく、雰囲気は暗く陰湿でないのも受けた理由だろう。

股旅演歌は橋幸夫の「潮来笠」(昭和35年)の大ヒット以来ほぼ忘れられた分野で、いわば隙間産業だったのだ。往年の名作が細々と歌い継がれてきてはいたが、めぼしい新曲はあらわれず、時代遅れになりつつあった。

さらにこのジャンルの歌はもちろん、ここしばらく歌謡曲・演歌は70・80年代の絶頂

を最後に徐々に衰えていき、ミリオンセラーは出ず、全体に停滞気味だった。しかも、従来の演歌歌手が、軒並み歳を取ってしまったり、失礼ながら大方ホストみたいだったり、人相の良くない組関係者みたいな風貌の持ち主が多かったから、女性歌手ばかりがもてて、ビジュアル時代に乗り切れず、その面でも氷川がもてはやされる土壌はあったといえるだろう。

さらに、かれには芸人としてのオーラがあり、華がある。まだ27歳。男は30過ぎるまで演歌を歌えないという説も首肯できる部分があるが⁽¹²⁾、インタビューなどで見るとなかなかの好青年であり、明るい演歌という世界を作りつつある。

では、彼はどんな演歌を唄うのか、デビュー作とその自己模倣のような第二曲、これが案外良く、両方ともヒットしたので、両方の歌詞を紹介しよう。

- 1) 「箱根八里の半次郎」。ただしこれには後日談があるから、これはワンセットで論じることにしよう。

縞の合羽も 三年鴉
意地の縞目も ほつれがち
夕陽背にして ススキを噛めば、
湯の香恋しい 里心

ヤだねったら ヤだね
箱根 八里の 半次郎

寄せ木細工よ 色恋沙汰は
つぼを外せば くいちがう
宿場娘と 一本刀
情けからめば 錆がつく

ヤだねったら ヤだね
まして 半端な 三度笠

杉の木立を 三尺よけて

生まれ 在所を しのび笠
おっ母すまねえ 顔さえ出せぬ
積もる不幸は 倍返し

ヤだねったら ヤだね
箱根八里の 半次郎 (松井由利夫作詞 水森英夫作曲)

夕陽背にしてススキを嘯むというのだから、これはもうマカロニ・ウェスタンのノリである。2番では半次郎の恋がほのめかされるが、これが省略されてもこの曲の意味は通じるし、特殊なやくざ言葉が含まれていないことに気づかれた方も、オールドファンには多いだろう。繰返し部分では“ね”の音で尾韻を踏んでいるのも利いている。

ただ股旅の「股」とは諸国を股にかけて、旅をすること。「箱根八里の半次郎」というのは二つ名といい、元来は当時農民には姓がなかったから、姓に代わってつけていたもので、やくざは縁起の良い物や、異名やあだ名、生地の名を冠するものが多かった。

次は先の後編である。

「箱根八里の半次郎」～風雲編～

月の湯ノ沢 霧立つ朝は
後ろ髪ひく 花ススキ
浮き世投げ節 三筋の絃^{いと}(13)が
切れりゃ涙の ほととぎす

ヤだねったら ヤだね
ヤだねったら ヤだね
箱根 八里の 半次郎

戻り馬かよ 馬子衆の鈴が
八里山坂 風になる
男 片意地 真っ平ごめん
人情振分 三島宿

ヤだねったら ヤだね
ヤだねったら ヤだね
まして 半端な 三度笠

袖を七分に 手っ甲脚絆⁽¹⁴⁾
いつか流れて 一昔
おぼろ霞の 権現様⁽¹⁵⁾に
片手拝みの 詫びを入れ

ヤだねったら ヤだね
ヤだねったら ヤだね
箱根 八里の 半次郎 (松井由利夫作詞 水森英夫作曲)

現代ギャルやオバギャルにも分かって貰えるよう、慎重に語句を選んできた作詞者も、ここにいたってもう種が尽きたか、三筋の絃やら手っ甲脚絆などという業界用語がでてきてしまった。しかし、本編から10年経った後であることが上記の3番の詩句（いつか流れて 一昔）から分かる。ヤクザや遊侠用語の解説は注に譲って、ここはひとまず置く。次はデビュー第2作である。

2) 「大井追っかけ音次郎」

渡る雁^{かりがね} 東の空に
俺の草鞋は 西を向く
意地は三島の 東海道も
代わる浮き世の 袖しぐれ

ヤっぱりね そうだろね
しんどいね 未練だね
大井追っかけ音次郎 音次郎

寄るに寄れない 清水の港
またぐ敷居が 高過ぎる
島田くずして 嫁菜を摘んだ
あの娘恨むは 筋違い

やっぱりね そうだろね
しんどいね 未練だね
胸にしみるぜ 茶の香り 茶の香り

越すに越せなきゃ しおからトンボ
土堤のすすきで 雨やどり
情け掛川 みかんの小枝
折れば涙の 花が散る

やっぱりね そうだろね
しんどいね 未練だね
大井追っかけ音次郎 音次郎 (松井由利夫作詞 水森英夫作曲)

「大井追っかけ音次郎」～青春編～

持って生まれた 性根とやらを
無理にけずれば 身が細る
四角四面の 浮き世の空を
気まま向くまま トンビ風

やっぱりね そうだろね
しんどいね 未練だね
大井追っかけ音次郎 音次郎

酒におぼれりゃ 洒落にもならぬ
生まれ大井の 川育ち

茶摘み娘と すっ飛び野郎
惚れたはれたで この首を

ヤっぱりね そうだろね
しんどいね 未練だね
横に振れない犬張り子 犬張り子

山が富士なら ^{おとこ} 侠は仁吉⁽¹⁶⁾
俺の鑑は ^{かがみ} お二方
柳芽をふきゃ 風さえ変わる
旅は鼻歌 風任せ

ヤっぱりね そうだろね
しんどいね 未練だね
大井追っかけ音次郎 音次郎 (松井由利夫作詞 水森英夫作曲)

もともと股旅演歌の世界は共通の知識が根底にないと意味が分からない箇所があるから、定番の語句が使えない作詞の苦勞が思いやられる。しかし、この曲では各繰返し部分に“ね”の尾韻ばかりか、“お”の音で頭韻も踏んでいる響きが出色である。

だが、半次郎の方は特定できないが、鬻物の常套で化政時代(1804~30)あたりを漠然と想定しているらしい。「音次郎」のリフレイン「しんどいね」などという用語はその点からもどうだろうか？ 疑問がないではないが野暮は言うまい。何しろ唄うご本人が股旅ものといわれたときは、「猫にマタタビ」のことだと思ったと正直に述懐していたが、それも無理はないし、デビューから数年で、任侠世界の特殊さ複雑さを十分理解せよと言うのは酷だ。歌手にしてこの状態で、その後一挙にこのジャンルの名作13曲を録音してしまったことになる。

もともと股旅物は映画との提携で生まれたものだが、演歌の遊侠古典ものは、今やかなりディープな知識がないと理解できなくなってしまった。一天地六⁽¹⁷⁾や賽の目崩れ⁽¹⁸⁾など専門用語の使用は極力避けて、ギャルにも分かる歌詞を書いているのはさすがだが、ただほとんど股旅ものの傑作は、甘くみてもたかだか30曲を数えるに過ぎないから、3年で氷川はこれをほぼ半分クリアしてしまったことになる。

結局、文末付表(p. 43)のように、彼の股旅演歌では、持ち歌は別にして、一番年代の

近い橋幸夫の「潮来笠」⁽¹⁹⁾と陽性な高田浩吉の「伊豆の佐太郎」⁽²⁰⁾が出来がよいことになる。戦前の暗い時代の作品はまだきれいな歌の歌い方で表面的なものだが、それが幸いし、かえって変に深刻にならないのが取り柄ということか。

3. 氷川のこれから

彼は童顔ではあるが、それでも27歳になる。これがこの先も赤い服着てドドンパだズンドコだでは浮かばれないし、残る課題は股旅以外の演歌でヒットを出すことだろう。人気は十分だから、後一曲が欲しい。成功すれば、名実共に一流歌手の仲間入りである。その意味でドドンパのB面「ハマナス旅情」は地味だが良い歌だと思うし、全体に抑え気味だが、実年齢に近い男の郷愁や恋心を唄うのだから素直に共感出来たのだろう。しかし、この人にあれもこれもとレコーディングをどんどんせかすのは無謀ではないか？ その結果、忌憚なくいえば駄作もある。例えば「赤い夕陽の故郷」など、かれの地声に近いハイ・トーンで、おや、ボーイ・ソプラノかと思うほどきれいな高音で素直に唄っているが、ただそれだけ。単調でふくらみがなく、上手な唱歌のようだ。

もともと氷川は普通の男声とかなり違って、ハイ・ノートが持ち味だが、低音で粘れないので、すぐ8度跳躍をしたがる。高音に強いと言っても、彼の声は悪い言葉でいえば、硬質で鋭角的、悪く言えば金切り声に近いところがある。おまけにシャウト唱法だから、CDだけを続けて聴くと疲れる。ライブのDVDの方がとげとげしさが和らげられている分だけ聴きやすいといえるかもしれない。この問題は、関係者や本人にも分かっている、アルバムの中で歌っている「女の宿」⁽²¹⁾は中域、低域を思いの外上手く使っている。しかし、この曲はテーマが人妻の不倫だから、まだこういう曲は難しいが、1, 2, 3番の各最終フレーズに工夫があり、非常にフェミニンな香りを放つのに成功している。

それと逆に出てくるのが前述の「無法松の一生～度胸千両入り～」である。数多い録音中、彼のものは最年少か、それに近いのではないだろうか？ また曲自体は2番が脚光を浴びた唯一の例だ。ただ、氷川にはこの大ネタはまだ少々荷が重い。実証してみよう。

「無法松の一生～度胸千両入り～」

小倉生まれで 玄海育ち
口も荒いが 気も荒い
無法一代 涙を捨てて

度胸千両で 生きる身の
男一代 無法松

空に響いた あの音は
たたく太鼓の 勇み駒
山車の竹笹 提灯は
赤い灯に ゆれてゆく
今日は祇園の 夏祭り
揃いの浴衣の 若い衆が
綱を引き出し 音頭取る
玄海灘の 風受けて
ばちがはげしく 右左
小倉名代は 無法松
度胸千両の あばれうち

泣くな嘆くな 男じゃないか
どうせ実らぬ 恋じゃもの
愚痴や未練は 玄海灘に
捨てて太鼓の 乱れうち
夢も通えよ 女男波^{みょうとなみ} (吉野不二郎作詞 古賀政男作曲)

詞をみただけで、この曲の聴かせどころは「度胸千両」であることが分かる。ここを唄うとき、ひばりも村田も浪曲の経験があるから、経過句の入りには細心の注意をはらい、音程の連続性を示そうとする。ところが、氷川は声の構造が男声にはめずらしく逆三角に近く、低音が一小節十分重厚に持ちこたえられない。村田と逆である。そのため、度胸千両で「あの音は～」で「の」の音を突然8度跳躍して、我々を驚かすが、この演出はどういうことか咄嗟には理解できない。細かくは補遺に譲るが、これは別にして、その後の「今日は祇園の夏祭り」と下降していく低域のフレーズで地声の幼さが、つい露呈してしまい、歌の重厚味を損っている。

しかし、そこはお師匠さん。水森英夫の新曲「ハマナス旅情」はヒットするかどうかは別として佳作だ。ただリフレインの「ハマナスひとつ」がキモだが、これを低音で決めきれない。もう少し低音域を維持できないと、例えば冒頭の「浜の燈台 岬のカモメ」でい

きなり8度跳躍を行うと同時に下降する部分は美質が光るために、全曲のフィナーレは「俺も一人」と重低音で決めたいところだが、そうはいかず最後はやはりオクターブを上げ絶叫して終わる。こういう佳曲に恵まれたのだから、大事に歌いこまないといけないし、演出もよく考えないといけない。この歌の世界は、大げさに言うと、日本人が慣れ親しんできた万葉集以来の「奇物陳思」という用法で、この場合はハマナスが物にあたる。それに託して切ない恋心を歌うのであり、もっとも伝統的な恋歌の様式である。

ハマナス旅情

てな おき れも - ひ と り
 なか お お れも - は な り

り - あ す は い ず こ か

お れ も - ひ と り -

り - あ す は い ず こ か

お れ も - ひ と り -

ハマナス旅情

白い燈台 岬のカモメ
 風に吹かれる ハマナスひとつ
 遠き都に 想い募れど
 北へ流れて 俺も一人

月のしずくか 夜露に濡れて

泣いているよな ハマナスひとつ
眠れぬままに たどる面影
せめて枯れるな 君の花よ

海の彼方に 朝陽が昇る
何を祈るや ハマナスひとつ
帰る故郷 今は遙かに
明日は何処か 俺も一人
明日は何処か 俺も一人 (仁井谷俊也作詞 水森英夫作曲)

演歌の定番である。失意の人は何故か北へ流れ（例えば「北帰行」）南を放浪しようとはしない。北国の荒涼たる風景が、満たされない自分の心象風景と重なるせいだろう。

この曲の楽譜を添付しておく。いかにこの青年のハイ・ノートが素晴らしいか分かると思う。しかし、シャウト型だから、嫌いな人は頭が痛くなりそうになる。例えば石原裕次郎はその逆で、かれの方は典型的な省エネのクルーナーである。だから聴き疲れしないのだ。

なお、もう一例曲を上げておく。オリジナルのようだが、クレジットがないので、断定できない。ただ筆者が調べた範囲では、まあ書き下ろしだろうと思われるし、この曲を収めた「男気」は目下かれの最良のアルバムである。

おやすみ夕子

夢がはじけて 消えたのと
ビルの谷間で 泣いていた
誰も迷子のこの都会だけど
僕がいつでも 傍にいる

おやすみ おやすみ 愛しい夕子
涙を拭いて お休みなさい

わたし翔べない 鴉だと
淋しいめをして うつむいた

離ればなれの ふたりだけど
夢で逢えるさ 今日もまた

おやすみ おやすみ 愛しい夕子
瞼を閉じて おやすみなさい

街の灯りも いつか消え
ひとりぼっちの 夜が更ける
そっと心で その名を呼べば
星がまたたく 北の空

おやすみ おやすみ 愛しい夕子
涙をふいて おやすみなさい (仁井谷俊也作詞 大谷昭裕作曲)

状況はどうも遠距離恋愛のようで、夕子ちゃんはやはりお約束通り北に逃れたようである。1人残された青年は恋心をこめて、彼女のためにおやすみを言う、或いは叫ぶのである。しかし、これはララバイで子守歌でもあるわけだから、高音一点張りで怒鳴っては、夕子ちゃんもおちおち眠れないだろう。硬質な声だから、前述したように、ライブの時はほどよくミキシングされて聴きやすいが、このCDだと金属性の高い声がうるさくなることがある。これは「男気」という今のところ最新盤からの抜粋である。このアルバム自体は過去最高といってもいい。

この氷川とは対照的なフランク永井の譜例をみていただきたい。代表曲のひとつ「おまえに」である。フランクは最低音でスタートして、無理なくポルタメントしていき、最高音に達して、終曲は安定した中音域で決めている。

氷川は昨年の紅白で、赤組のトリ天童よしみの直前に唄うという厚遇を受けた。しかし、任侠股旅物は、オリジナルを除いてすでに13曲を録音してしまったので、今は赤い服着て、ドドンパだのズンドコだのを唄っている。20歳前後の青年ならともかく、30代目前の歌手としてはあまり好ましい姿ではない。今後はもっと低域・中域を広げ、名実共に大人の歌手にならねばならない。所属プロの社長が故春日八郎や三橋美智也のファンだったので、その後継者というコンセプトで売るつもりのようなのだが、さてそれはどうだろう？しかし、「星屑の町」(三橋美智也)のカバーは良かった。

お ま え に

唄■フランク永井

詞■岩谷時子

曲■吉田正

そばにいて くれるー だけーでいーい
 だまって いてもー いーいんだ よ
 ぼくのほころび ぬえるのは おなじころの
 きずをもつ おまえの ほかに だれもな
 い そばにいて くれるー だけーでいーい

継承者がいないという点で言えば、フランク永井が病に倒れ、引退し、最近マヒナスターズの和田弘も亡くなったという。彼らは全盛期にはムード演歌と称していて、都会風な洒落た感じの曲がよかったが、この流れにも後継者がいない。声域の違いはさておき、ねらい目かもしれない。今後どうもってゆくのか、いずれにせよ難しい時期にさしかかっているといえよう。

蛇足ではあるが、誰かに教わったのか、クセなのか、この人は股旅ものではもちろん、他の曲でもしばしばラ行音を巻き舌で発音する。これは一回や二回はいいとしても、数が多過ぎて、歌の品格をいちじるしく落とすときがあるのには注意を要する。(悪例としては名作「湯島の白梅」の大事な歌い出しの部分がある。逆に「花と竜」では、いなせで勇み肌な心意気が生きているが)

あ と が き

奇しくも、本稿の初校が上がって来た日、氷川きよしの新譜CDが発売された。また、偶然朝日新聞社の週刊〈AERA〉2003年7月7日号に岩切徹氏が「現代の肖像」に、“ヤだねったら、ヤだね！ 歌手氷川きよし” (pp. 63~67) という記事を書かれているのを知った。これは氷川のことを一般誌がまともに取り上げた初めての物ではないかと思う。本人へのインタビューを含め、経歴や曲の作られ方までも、興味深い記事が詰まっているので、参考になった。この記事はタイトルの後に長いキャプションがついているが、こんな風にかかれている。

「ズバッ、スコーンと抜ける歌声。子鹿みたいなルックス。孫も婆ちゃんも唱和する『演歌の王子さま』である。どんより曇った平成日本の、町から町へと旅ガラス。書き割りでもいい。つかの間でもいい。青空が見たい。そんな人々の憂さを晴らす。」

「ヤだねったら、ヤだね！」、この駄々をこねるような繰返しと振りの派手さ、まことに要を得た評言である。

新譜は初めての2枚組で氷川きよし・演歌名曲コレクション4・番場の忠太郎である。オリジナルが既発の3曲を併せて8曲。カバー物が10曲である。ここでも、岩切氏が述べられていることがそのままの声であり、歌唱である。カバー曲は古くは児玉好雄の「無情の夢」(昭和10年) から、昭和41年、城卓矢の「骨まで愛して」まで10曲をディスクBに収録するが、例によって、春日、三橋の曲も1曲ずつ入っている。彼ほどの売れっ子でも、オリジナルで先行発売したものを引くと、新曲は4曲にすぎず、演歌部門に良い作詞・作曲者が少ないことが分かる。B面の方は選曲のコンセプトがよく分からないし、向日性の曲は元気印一辺倒のハイパーな歌声が少々鼻につきかけているが、やはり良いようだ。

今後演歌歌手としては、女歌をどう歌うか、定番の古賀メロディ、特に「影を慕いて」や「人生の並木路」のような泣き節をどうこなすかが具体的な課題になるだろう。それに、総数100曲録音の大台目前にしては女歌が少ない。明るい声なので、余り向かないのか、筆者の把握する限り、女歌は4曲しかなく、古賀メロディも4曲しかない。いつか古賀メロディを全曲集のような形にするのか、それとも個別にアルバムごとに気長に入れていくか注目が集まるだろう。

次に、新譜は股旅物の原点に立ち返った形になるが、今後なおこの路線を維持出来るのかも大きな問題である。

*氷川きよしディスコグラフィ

股旅演歌名曲選／氷川きよし 箱根八里の半次郎～風雲編 2000年6月 COCP-30920
氷川きよし演歌名曲コレクション 大井追っかけ音次郎～青春編 2001年6月 COCP-31460
股旅演歌名曲選・2／氷川きよし 箱根八里の半次郎 2000年10月 COCP-31123
大井追っかけ音次郎／氷川きよし 2001年1月
きよしこの夜 KIYOSHI 2001年11月 COCA-15626
氷川きよし・演歌名曲コレクション2～きよしのズンドコ節 2000年5月 COCP-31863
銀河～星空の秋子～ 2002年11月 COCP-31987
氷川きよし・演歌名曲コレクション3 白雲の城 2003年5月 COCP-32206
ラブリー TANA&KIYOSHI 2003年10月 COCA-15545
男気 氷川きよし 2003年11月 COCP-32465
KIYOSHI; 人生号 Jinsei-GO 非売品
きよしのドドンパ 2004年1月 COCA-15626
氷川きよし・番場の忠太郎 (MAXI) 2004年7月 COCA-15678
氷川きよし・演歌名曲コレクション4 番場の忠太郎 2004年9月 COCP-32843～4
(制作・発売はすべてコロムビアミュージックエンタテイメント・ただし8センチCDは除いた)

*氷川きよしビデオグラフィ

A. ビデオクリップ

1. 氷川きよし オリジナルベスト コロムビア 2002年 COBA-4224
2. 氷川きよし オリジナルベスト 2003年 コロムビア COBA-4180

B. コンサートビデオ (DVD)

1. 氷川きよし チャレンジステージ IN 中野サンプラザ 2000年10月 コロムビア COBA-4115
2. 氷川きよし ファーストコンサート IN 東京国際フォーラム 2002年 コロムビア 2002年 COBA-4157
3. 氷川きよし スペシャルコンサート コロムビア 2002年 COBA-4211
4. 氷川きよし スペシャルコンサート 2003年 コロムビア 2003年 COBA-4292

(詳細は氷川きよし公式サイト <http://www.columbia.jp/~hikawa/> 参照)

参考文献

別冊トップランナー／氷川きよし KTC 中央出版 2002年

氷川きよし わたしはあきらめない KTC 中央出版 2003 年

本間繁義 きよしへ アールズ出版 2004 年

田村栄太郎 やくざの生活 生活史叢書 4 雄山閣出版 平成 6 年

補 遺

著書もあるソプラノ歌手藍川由美に、いわゆる古賀メロディを唄ったCDが2枚あるうち、チェンバロを伴奏に歌ったものに、文中の「無法松の一生～度胸千両入り」があり、彼女の厳密な楽譜校訂の結果、当初は2番もあって、〈度胸千両〉はその後にはいり、3番につながるのが、本当の姿だったと知った。今では唯一のCDで聴ける2番なので、歌詞を残しておきたい。

今宵冷めたい 片割れ月に
見せた涙は嘘じゃない
女嫌いの 男の胸に
秘めた面影 誰か知る
男松五郎 何を泣く

というものである。現行の省略形の方が納まりも、構成も良いとは思うが、資料的には意味があるだろう。その後の調べで「度胸千両」には2番もあるのが分かったが、あまり良い詞とはいえないものなのでこれは省略する。

さらに、その「度胸千両」で、氷川の「この音は」の部分で「の」の音の8度跳躍を批判したが、何と藍川盤でもここでオクターブ上げている。これは偶然そうなったのだとすれば、氷川の音感・本能は鋭いし、原譜を勉強しての上なら、なお好ましい。

(参照：古賀政男作品集—誰か故郷を想はざる 藍川由美（ソプラノ）中野振一郎（チェンバロ）DENON COCQ-83152)

注

- 1 アンリ・デュバルク Henri Duparc (1848～1933) フランスの歌曲作家。現存するのは18曲にすぎないが、ボードレールの「旅への誘い」など粒よりの歌曲である。
- 2 エディット・ピアフ Edith Piaf (1915～63) フランスのシャンソン歌手。代表作には「愛の賛歌」(1950年 創唱)。
- 3 オーストリアのレハール Franz Lehár (1870～1948) 作曲の全3幕オペレッタ。「Die Lustige Witwe」(The Merry Widow)。
- 4 前注のヒロイン、ハンナの歌う望郷の名アリア。なお「メリー・ウィドー」はワルツもよく知られている。
- 5 そのもっともシンプルなのが、「無情の夢」(佐伯孝夫作詞 佐々木俊一作曲 昭和10年 児玉好雄・創唱)である。歌詞はただひたすら恋情を歌うのみで、歌詞も2番しかないが、メロディが良く、戦後何度かリバイバルした。新しいところでは大川栄策のものがヒットしたことがある。
- 6 三浦洗一 (1926～) 他に「東京の人」など。

演歌再興—氷川きよしの出現

- 7 弁天小僧（佐伯孝夫作詞 吉田正作曲）昭和 30 年 三浦洗一・創唱
- 8 落葉しぐれ（吉川静夫作詞 吉田正作曲）昭和 28 年 三浦洗一・創唱
- 9 泥棒・盗賊のこと。
- 10 五人男のひとり，南郷力丸のこと。
- 11 無法松の一生～度胸千両入り（吉野夫二郎作詞 古賀政男作曲）昭和 33 年 村田英雄・創唱
- 12 吉川精一「哀しみは日本人」—演歌民族論 1992 年
- 13 三筋の絃 三味線のこと。
- 14 手っ甲 布や皮で作られ、手の甲を覆う物。武具にも労働用・旅行用にも使う。脚絆は旅などで、歩きやすくするため脛にまとう布。
- 15 箱根神社の旧称。
- 16 田村栄太郎「やくざの生活」平成 6 年 p. 218sq
- 17 さいころのこと。
- 18 さいころの目が合わせて 10，もしくは 20 になると，最悪の結果になる。それを賽の目崩れなどといった。（詳しくは前掲田村著の pp. 28-51）
- 19 潮来笠（佐伯孝夫作詞 吉田正作曲）昭和 35 年 橋幸夫・創唱
- 20 伊豆の佐太郎（西条八十作詞 上原げんと作曲）昭和 28 年 高田浩吉・創唱
- 21 女の宿（星野哲郎作詞 船村徹作曲）昭和 39 年 大下八郎・創唱

付 表

曲名	作詞者	作曲者	創唱者	年代
赤城の子守唄	佐藤 惣之助	竹岡 信幸	東海林 太郎	昭和 9
旅笠道中	藤田 まさと	大村 能章	ク	昭和 10
妻恋道中	藤田 まさと	阿部 武雄	上原 敏	昭和 12
旅姿三人男	宮本 旅人	鈴木 哲夫	ディック ミネ	昭和 13
名月赤城山	矢島 窮児	菊地 博	東海林 太郎	昭和 14
大利根月夜	藤田 まさと	清水 保雄	田端 義夫	昭和 14
流転	藤田 まさと	阿部 武雄	上原 敏	昭和 12
勘太郎月夜唄	佐伯 孝夫	清水 保雄	小畑 実・藤原 亮子	昭和 15
伊豆の佐太郎	西条 八十	上原 げんと	高田 浩吉	昭和 28
雪の渡り鳥	清水 みのる	陸 奥 明	三波 春夫	昭和 32
一本刀土俵入り	高橋 掬太郎	細川 潤一	三橋 美智也	昭和 32
潮来笠	佐伯 孝夫	吉田 正	橋 幸夫	昭和 35
旅鴉	藤田 まさと	遠藤 実	五木 ひろし	昭和 47